

## 第 7 章 仰岳会のあゆみ

### 第 1 節 工学部同窓会の発足

本学工学部の母体たる高岡工業専門学校が国立大学設置法（法律第150号）に基づいて、富山高等学校、富山師範学校と富山青年師範学校、富山薬学専門学校と併合、統括され、新制富山大学に生まれ変わったのは終戦より4年を経た昭和24（1949）年5月であった。初代学長には清水虎雄、初代工学部長には柏忠夫教授が就任し、同年7月15日に第1回の入学式が挙行された。当初工学部は電気、機械、金属、化学の4学科設置を希望していたが、研究設備や教官の陣容等から縮小を余儀なくされ、電気工学科、工業化学科、金属工学科の3学科をもって出発した。

発足より4年後の昭和28（1953）年3月、第1回生を世に輩出するに当たって同窓会設立の気運が盛り上がり、幾度かの設立準備会による審議を経て同年5月3日、工学部同窓会創立総会が工学部第1回卒業生ならびに高岡工専卒業生約751名を集めて開催された。当総会では工学部と会員との関係を蜜に、かつ会員相互の親睦をはかるを目的とした18条にわたる工学部同窓会会則が了承された。尚、12年後の昭和40（1965）年に会則は大幅に改正され、会長も副会長も共に会員よりの互選となるが、当初は工学部長が会長を兼務していた。

#### 富山大学工学部同窓会会則（抜粋）

第三条 本会は次の会員より成る。

- 1．正会員 富山大学工学部及び高岡工業専門学校卒業生
- 2．特別会員 富山大学工学部現教職員
- 3．準会員 富山大学工学部学生但し富山大学工学部に縁故あるものは会長の承認により会員たる事を得る。

第六条 会長は工学部長之にあたる。

第七条 副会長は正会員より互選する。

第十七条 正会員は入会費として専門課程在学中500円を納入し会費として毎年200円宛納入すべきものとする。

翌昭和29（1954）年5月に同窓会誌創刊号が発行され、その後隔年に7号まで発行された。しかし当初設定された会費（会則第十七条）の納入がとかく滞り、これが会計を次第に圧迫して同窓会誌の発行にも支障を来す事態となったため（昭和32年12月）次年度より会誌と会報を交互に毎年発行するよう規定が改正されている。昭和30年度における正会員数は約958名で、かく財政逼迫の最中ではあったが、昭和31（1956）年9月の魚津市大火災（延べ焼戸数1,561戸、重軽傷者170名、死者5名、損害推定額75億円）の折には在住の罹災者5名に各5,000円の見舞金を進呈している。

### 第 2 節 工学部の五福移転問題

富山大学の集中統合は大学発足以来の懸案事項であった。五福への移転は紆余曲折はあったものの一応、文部省、富山県ならびに地域住民の了解を得て教育学部（昭和26年）から始まり、次いで経済学部（昭和32年）、大学本部（昭和33年）、文理学部（昭和37年）の順に漸次移転して、薬学部（昭和39年）移転時点では工学部を残すのみとなった。

かかる状況下にあつて工学部教授会（上野亨学部長）は五福への早期移転を決議し（昭和39年5月13日）、この結果を大学本部へ連絡、本部はこの旨を文部省へ報告している。しかし統合問題が富山大学の総意として大学評議会で決議されるまでには尚2年の歳月を要した（昭和41年5月）。

他方、工学部同窓会は昭和40（1965）年の改組により新たに選出された山田尚司会長（大電1）を中心に「工学部移転促進協議会」が結成され、これが

その後父兄ならびに学生も交えた三者代表の「五福集中移転促進協議会」に発展している。当促進協議会の活動の一端は会報7号（昭和43年）の篠田務副会長（大金1）の寄稿文からもよく推察されよう（下記）。

#### 工学部同窓会の充実を望む

同窓会副会長 篠田 務

（前略）

工学部施設の老朽化にともない改築を必要とする今日、併置設備の利用、大学の発展、教育上の使命と種々の状況を合せて考慮し五福へ集中させる事が最善の策と考え工学部五福集中を決議された工学部教授会および大学評議会に我々は心から賛意を示すものであります。五福集中に関しては地元の強い反対であり進展していない様ですが、昭和41年7月に学長事務局が文部省・関係各省へ陳情した折、当局者より「富山大学の集中問題が解決されるまで予算および学科の増設、増加は絶対駄目」との制約の申し渡しを聞き、我々同窓会としても静観出来ず9月に五福集中促進協議会の成立を見て一般市民への事情説明、関係局への陳情等と目下運動を行っています。本年も6月に山田会長と私、父兄代表2名、学生代表3名で文部省の関係当局の官房長、局長、次官等各関係官に面接陳情書を手渡しさらに、衆参文教委員長、郷土国会議員にも面接したが参議員選挙の為不在で秘書に依頼を行った。各位は陳情書の趣旨に賛同の意を示され、我々陳情団としても心強さを感じた。



同窓会会報第7号

また、高岡当局も工学部に替る設備が来る確約があればとの賛意も聞かれはじめ、一步前進したものと考えられる。この様な問題は早期解決が遅れると社会的にも損失であり、工学部自体も時の流れから取り残される恐れがあり、我々が育った母校の発展の為同窓会員一人一人が関心を持ち強力なバックアップを行い、一日も早く解決を見て社会に優秀な人材、研究成果を送りうる様に努力したい。工学部早期充実と会員各位の絶大なる協力を願う。

五福移転問題は、年代順には下記の経緯を経て終焉を迎えることになるが、

昭和39年 工学部教授会移転決議

昭和41年 大学評議会工学部統合を決議

昭和52年 コミュニティカレッジ案浮上

昭和55年 高岡産業短期大学創設準備調査費

昭和56年 高岡市長、移転準備開始を了承

昭和57年 高岡産業短大創設準備費

昭和58年 高岡産業短大創設費計上、工学部建設地で地鎮祭挙行

五福移転の成就が何故、かくも遅滞したのか、とさらにこの騒擾、混乱の20年の歳月が工学部の発展に如何なる影響をもたらしたのかは柳田学長（昭和54～60年）と大井工学部長（昭和54～58年）の回顧文（昭和60年、同窓会会報第21号）中に如実に示されている。反省と検証の意味を含めて以下に示す。

#### 富山大学工学部移転統合の回顧

富山大学長 柳田友道

前略

私ははじめ国立大学なのだから、国の方針さえしっかりしていれば、地元との多少の摩擦はあっても、移転統合ぐらいできそうな

ものだと考えていた。しかしいろいろ勉強しているうちに、この考えは地方大学の位置付けを知らぬ、いわばある意味で傲慢な考え方であることが次第にわかってきた。一つの地域に立地する大学は、あくまでも地域あつての大学であり、またその地域は大学あつての地域であることが、歴史的にしっかりと根づいているのであって、その関係

に逆らって何かを強行すれば、両者が共倒れになりかねないし、そのしこりは抜き難いものになる恐れがあるという、この感覚を体得するのに私は長い時間を費やした。

(後略)

(学長就任までの経過、工学部移転気運の醸成、高岡短大創立と工学部移転とのかね合い、工学部跡地処理問題等について記述)

(同窓会会報第21号)

#### 工学部の移転統合のあらまし



富山大学教授 大井信一

昭和58年3月工学部建設予定地における鍬入れ式に出席し、長かった20年を顧みて感無量であったのも昨日のような気がします、

待望の新校舎建設もほぼ終わり今秋を以て移転が完了する運びとなり、ほんとうに夢の様な思いであります。

ここに、改めて関係各位の御尽力に対し厚く御礼申し上げる次第であります。特に、文部省大学局(当時)、管理局教育施設部の御理解御協力、富山県知事、国会議員、高岡市長などの御支援御協力、後藤、林、柳田各学長、室町元工学部長及び歴代の事務局長や事務局の方々などの学内関係各位の御努力のおかげだと感謝しております。

(中略)

(移転問題を三期に分けて、その経緯を詳述)

第1期 後藤学長、下野地区に移転用地6000㎡を購入、その他。

第2期 林学長、室町工学部長、代替施設(産業大学、北陸研究所、経営短大の拡充等)の選択に苦慮。コミュニティカレッジ案浮上等。

第3期 知事と文部省大学局長との間で、「高岡産業短大の二上地区への早期創設努力と工学部跡地の地元への譲渡、特にその一部の早期利用について協議が整った時点で工学部移転の了承」等、に関する合意事項、その他。

工学部移転問題の解決を顧みて、本来優先すべき研究教育上の理由だけでは地域社会の強いしが

らみを乗り越えるにはあまりにも弱かった事を痛感しました。それにしても20年と言う歳月は、あまりにも大きな犠牲を払ったのではないかと思います。高度成長期に学部拡充の好機を逸し、後発の他大学工学部の後塵をはいする結果となりました。然も問題がやっと解決した時は、財政再建、行政改革の厳しい環境に遭遇した。然しながら、移転統合と言う悲願はかなえられた。他学部との交流、研究教育上の協力など統合のメリットも数えきれない。やっと工学部の戦後は終わった。五学部と教養部が同居し富山大学の将来の発展に向けて真の協力体制が出来たことは何事にもまして喜ばしいことであると思います。

(昭和60年3月末高岡校舎にて)

(同窓会会報第21号)

総工費約40億円(延べ面積21,000㎡)を投じての工学部建屋建設は昭和58(1983)年3月の地鎮祭、鍬入れ式、新校舎配置図の発表を機に本格的に始まり、以下をもって一応移転問題に終止符が打たれたことになる。

昭和59年3月 第1期工事で機械棟、金属棟完成、8～9月移転

昭和60年1月 第二期工事で電気棟、化学棟完成、8～9月移転

昭和60年1月 大学主催の移転式典、祝賀会

他方、同窓会では昭和58(1983)年7月に五福移転記念事業計画委員会を組織し、学内常任委員を中心に事業計画を立案、同年8月の総会で承認を得て後、同年10月29日に実行委員会が正式に発足した。

富山大学工学部五福移転記念事業実行委員会幹事

実行委員長；山田尚司

副委員長；嶋尾一郎

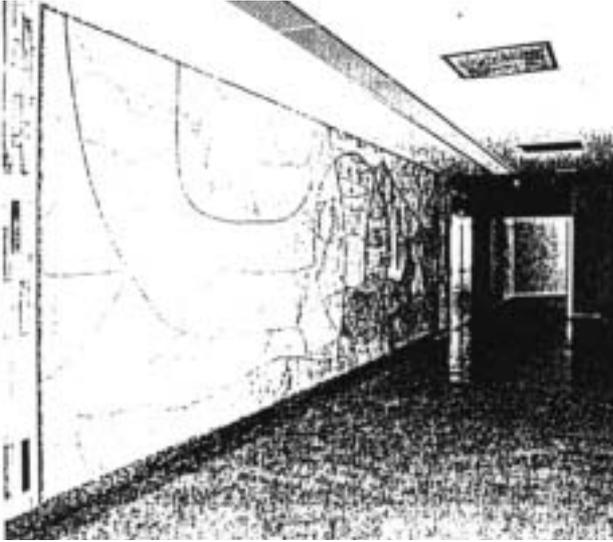
募金事業部幹事；藤田 宏、時沢貢、島崎長一郎、品川不二雄、松田秀雄、能登谷久公、三日市政司、岩城敏博、池野進、川崎博幸

記念事業部

工学部史幹事；八木 寛、島崎利治、松木賢司

記念碑建立幹事；西部慶一、笹倉寿介

記念式典幹事；多々静夫



同窓会寄贈フレスコ壁画



「雄気」像除幕式



白樺（東海支部寄贈）



ハナミズキ（関東支部寄贈）



工学部統合移転祝賀会（昭和60年11月）



旧高岡キャンパスの正門門柱



第2記念碑除幕式（平成3年10月）



五福移転記念事業記念碑（昭和61年9月）

総務幹事；嶋尾一郎、多々静夫、長谷川淳、穴田 博  
会計幹事；作道栄一、加藤 勉

同実行委員会では下記の事業計画を提案、昭和59（1984）年11月から8,000万円以上の醸金を目標に事業資金の募集を開始した。

当初の計画はa)～h)であったが、諸般の事情により中止されたものと、追加されたものとがある。

#### 事業計画

- a) 校舎跡地に記念碑の建立（昭和61年9月、富山県高岡文化ホール竣工時に除幕）
- b) 工学部史発刊（中止）
- c) 学術図書寄贈（中止）
- d) 同窓会館の建設（中止）
- e) 門柱移設記念造園（昭和61年、1柱工学部、1柱経済学部）
- f) フレスコ画製作寄贈（昭和58年、本学教育学部助教授、丹羽洋介「無限の創造」）
- g) 記念講演会および祝賀会（昭和60年11月、東北大学教授 西沢潤一、「半導体工業の進歩とその影響」, 出席者292名）
- h) 工学部発展支援基金
- i) 銅像建立（昭和61年10月、作者 昼間弘、「雄気」）
- j) 旧講堂シャンデリアの移設展示（昭和61年7月）

k) 東海支部白樺10本寄贈、関東支部ハナミズキ10本寄贈（新工学部入口周辺に植樹）

募金締切を一応、昭和60（1985）年1月として趣意書6451通を企業ならびに卒業生（6,132名）宛に郵送、

昭和60年4月10日現在、応募者数1,705名、  
募金額 2,684万円

（同年6月、再度、依頼状4580通を郵送）

同年9月5日現在、応募者数2,254名、

募金額 3,483万円

この約3,500万円中の1,000万円を支援基金として留保し、残額を上述の各事業に配分して予定の行事を遂行しえた。尚事業資金の獲得に際しては、約30社より選出された学外実行委員各位の絶大なる協力のあったことを忘れてはなるまい。

### 第3節 同窓会の組織強化に向けて

同窓会の創立総会出席者は、石原学部長、養田教授、広岡講師、柳瀬事務長、藤森厚生指導係長、工専卒業生8名、第1回卒業生6名であった。この顔触れからも推察できるように、設立当初の状況から、「工学部と同窓会とは一体」との感が甚だ強く、冒頭でも述べたように昭和28年の創立より昭和39（1964）年まで、工学部長が同窓会長を兼務し、しかも同窓会業務のほとんどを工学部事務官（学務係）に委託していた。昭和39年度には卒業生数も2,010名に達し（大学卒業生は1,259名、工専卒業生751名）、同窓会業務が工学部業務を次第に圧迫する事態（昭和42年、大学院工学研究科設置）となってきたこと等もあって、同窓会は昭和40年度に、「会長は正会員より互選する（工学部長は名誉会長とする）」等の条項を含む会則の大幅な見直しを行い、組織の改善と強化を図った。以来、下記が順次実施されてきている。

昭和42年 終身会員制の導入。

昭和43年 会費徴収業務の合理化、簡素化。

（パンチカードシステムの採用と宛名印刷機の導入）

昭和44年 同窓会誌巻末に掲載していた会員名簿

を分離し、別途作成。

昭和55年 工学部主催の卒業生壮行会が同窓会主催となる。

昭和57年 同窓会主催の工学部移転記念事業の実施。

同窓会活動の基盤たる会費は当初、入会費500円、年会費200円をもって出発したが、その徴収が何かと滞り、当会の運営そのものをも危うくしかねぬ状態となってきたため、昭和42(1967)年に終身会費制を導入し、以後は段階的に増額されてきて、現在2万円が、入学時に徴収されている。同窓会会費の推移、および歴代会長と副会長ならびに学内常任委員を以下に挙げた。

	会長	副会長
昭和28年	石原寅次郎 (7カ月) 横山辰雄 (6年)	吉山鏗一「工化、1」 (4年7カ月) 吉山鏗一 本田 右「工機、1」 (2年)
昭和34年	南日 実 (1年3カ月)	山田尚司「電、1」 (2年)
昭和36年	野路末吉 (3年)	山田尚司 本田 右 (3年)
昭和39年	上野 亨 (1年4カ月)	山田尚司 本田 右 (1年)
昭和40年	山田尚司 (25年)	篠田 務「金、1」 (5年) 本田 右 篠田 務 (13年) 本田 右 篠田 務
平成2年	松谷武男「化、6」 (10年)	多々静夫「金、3」 (7年) 増田 保「電、5」 八木 寛「電、7」 (3年) 増田 保 (多々静夫) (1年)

増田 保  
加藤 勉「化、6」  
(6年)  
浜谷重治「機、9」  
(12年3カ月)

平成12年 高見信行「機、6」 浜谷重治  
長谷川淳「化、11」

#### 同窓会会費の推移

昭和28年～41年	入会費500円、年会費200円
昭和42年～47年	終身会費4,000円
昭和48年～49年	終身会費6,000円
昭和50年～51年	終身会費8,000円
昭和52年～59年	終身会費10,000円
昭和60年～62年	終身会費15,000円
昭和63年～平成11年	終身会費20,000円

当会には上記の外に、県内企業約25よりの代表から成る学外委員会があり(委員名割愛)、問題が生じた場合には、まず学内委員会で、次に学内外委員会で諮られ、最終的に総会で決議される。

平成11(1999)年3月時における卒業生数は12,046名である(大学卒業生11,295名、工専卒業生751名)。同窓会(仰岳会)のこの50年間は、これらの諸委員と会員諸兄の努力と協力により、運営、維持されてきた。

## 第4節 工学部同窓会の拡張

### 支部の結成

同窓会(昭和62年7月17日の第35回総会において仰岳会と改称)の会則、第1章第2条に「本会は会員相互の親睦をはかり、富山大学工学部および工業の発展に資するをもって目的とする」と明記されている。会員数が増加するに従ってとかく、会員の親睦関係が損なわれがちであること、ならびに仰岳会の充実、活性化および五福移転記念事業の実施に際し、会員の尚一層の協力を得たいこともあって、支部結成の働き掛けが当時の副会長多々静夫、篠田務の両名により積極的に行われ、昭和59(1984)年12月に新東海支部が誕生し、これを契機に平成4

(1992)年8月には関東支部(旧の関東会を一新)が、また平成6(1994)年11月には関西支部が相次いで誕生した。支部結成の必要性については、事務連絡、会費徴収の能率化等の観点より、学内外委員会の席上で早くから話題に上っていた。同窓会設立当時の学生の結束は固く、しかも設立に関与した多くの卒業生にとって、同窓会も工学部も一入感慨深いものがある。企業あるいは同好の士が集いたる

非公式な支部が、例えば、北電支部、鋼管立山会、古城会、ホクセイアルミ支部、ポンポン会、関東会、東海支部など沢山あり(同窓会会報第8号、同窓会の記録(2);藤森清一)、現在、尚存続するものもあると聞いている。同窓会会報第11号(昭和48年)に写真入りで掲載されたる工学部同窓会館の建立は、卒業生一同の早くからの夢であり、この夢を単なる夢として終わらせたくないものである。

歴代 仰岳会 常任委員名簿

年 度	総 務 担 当	事 業 担 当	会 計 担 当
昭和41年	嶋尾 一郎(化工専3)	西部 慶一(工化1)	作道 栄一(工化1)
	多々 静夫(金属3)	笹倉 寿介(工化2)	藤田 宏(電気2)
~42年	時澤 貢(金属4)		
43年	北川 泰郎(電気6)	島崎長一郎(工化5)	品川不二雄(金属5)
44年	大住 剛(機械10)	加藤 勉(工化6)	能登谷久公(機械9)
45年	岩城 敏博(機械13)	長谷川 淳(工化11)	松木 賢司(金属13)
46年	川田 勉(金属15)	穴田 博(金属14)	島崎 利治(金属10)
47年	八木 寛(電気7)	蓮覚寺聖一(工化13)	三日市政司(電気13)
48年	松田 秀雄(電気7)	嶋尾一郎	袋谷 賢吉(電気19)
49年	多々 静夫	宮腰 隆(電気18)	桑原 道夫(電気18)
50年	西部 慶一	笹倉 寿介	寺山 清志(金属19)
51年	作道 栄一	時澤 貢	川崎 博幸(化工19)
52年	長谷 博行(電気19)	島崎長一郎	品川不二雄
53年	加藤 勉	石原 外美(機械19)	能登谷久公
54年	長谷川 淳	大住 剛	山田 茂(生機21)
55年	松木 賢司	岩城 敏博	春山 義夫(機械19)
56年	島崎 利治	穴田 博	吉澤 壽夫(電気19)
57年	八木 寛	作井 正治(電気20)	丹保 豊和(電子20)
58年	三日市政司	池野 進(金属19)	草開 清志(金属19)
59年	松田 秀雄	川田 勉	酒井 充(電子27)
60年	蓮覚寺聖一	宮腰 隆	森田 義則(電子26)
61年	寺山 清志	山本 辰美(化工25)	高辻 則夫
62年	島崎長一郎	袋谷 賢吉	山田 茂
63年	品川不二雄	高瀬 均(化工23)	平澤良 男(機械24)
平成元年	時澤 貢	桑原 道夫	吉澤 壽夫
2年	西部 慶一	川崎 博幸	田代 発造(生機25)
3年	石黒 隆義(金属2)	大住 剛	長谷 博行
4年	笹倉 寿介	能登谷久公	砂田 聡(金属28)
5年	長谷川 淳	松木 賢司	広瀬 貞樹(電子22)
6年	加藤 勉	石原 外美	塚田 章(電気33)
7年	岩城 敏博	中嶋 芳雄(電気21)	松田 健二(金属34)
8年	佐々木和男(電気17)	作井 正治	中茂 樹(電子38)
9年	池野 進	草開 清志	須加 実(電気40)
10年	丹保 豊和	松田 秀雄	酒井 充
11年	穴田 博	島崎 利治	山根 岳志(化工41)
12年	川田 勉	山本 辰美	丸山 博(電情1)

各支部の歴代役員名簿

東海支部

昭和59年～平成6年

支部長 高木 浩孝(専金1)  
副支部長 大原 幸二(専金1)  
服部 学(専化1)  
幹事 坂本 知正(専電1)  
鍋島 昇(電気9)  
高桑 栄一(工化10)  
村下 敏事(機械10)  
室谷 秀治(金属17)

平成6年～10年

支部長 坂本 知正(専電1)  
副支部長 子田 博(機械7)  
幹事 大原 幸二(金属1)  
沢田 日出(金属5)  
鍋島 昇(電気9)  
高桑 栄一(工化10)  
上城 一正(電気13)  
宮内 啓吉(機械13)  
川崎 一正(生機15)  
室谷 秀治(金属17)  
一ノ瀬喜之(金属18)  
樋爪 敏夫(工化19)  
荒江 光洋(生機15)  
三村 稔(生機29)  
増田 勉(電気32)  
舟見 弘和(生機36)  
月村 修一(機械39)

平成10年～11年

支部長 子田 博(機械7)  
副支部長 鍋島 昇(電気9)  
宮内 啓吉(機械13)  
幹事(代表) 上城 一正(電気13)  
(会計) 樋爪 敏夫(工化19)  
川崎 一誠(生機15)  
室谷 秀治(金属17)  
一ノ瀬喜之(金属18)  
橋本 周明(工化21)  
増田 勉(電気32)  
舟見 弘和(生機36)  
顧問 坂本 知正(専電1)

関東支部

平成4年～7年

支部長 上坂 健一(金属1)  
副支部長 岩田 英夫(工化6)  
長田 文雄(機械8)  
幹事(総務) 江尻 弘(工化10)  
飯田 敏三(工化14)  
高崎 惣一(金属19)  
田中 武司(生機21)  
飯孝 之(電子29)  
(会計) 平尾外志雄(生機24)

平成7年～10年

支部長 岩田 英夫(工化6)  
副支部長 長田 文雄(機械8)  
佐々木龍也(金属10)  
幹事(総務) 飯田 敏三(工化14)  
高崎 惣一(金属19)  
田中 武司(生機21)  
岩根 正敏(化工27)  
飯 孝之(電子29)  
(会計) 平尾外志雄(生機24)

幹事 広瀬 高英(専金1)  
平野 有和(専化2)  
高島美智雄(専機3)  
上坂 健一(金属1)  
榎田 芳雄(電気3)  
浅野惣三郎(金属4)  
夏見 芳雄(工化6)  
横道 孝二(工化9)  
山下 欽一(工化14)  
折田 公也(生機25)  
木村 淳(機械31)  
神谷 英司(機械39)

平成10年～11年

支部長 岩田 英夫(工化6)  
副支部長 長田 文雄(機械8)  
佐々木龍也(金属10)  
幹事(総務) 飯田 敏三(工化14)  
高崎 惣一(金属19)  
田中 武司(生機21)

幹事(総務)飯 孝之(電子29)  
 (会計)平尾外志雄(生機24)  
 幹 事 広瀬 高英(専金1)  
 平野 有和(専化2)  
 高島美智雄(専機3)  
 山口 敬(専竈5)  
 上坂 健一(金属1)  
 浅野惣三郎(金属4)  
 夏見 芳雄(工化6)  
 山下 欽一(工化14)  
 中村 克巳(生機18)  
 前田 幸(工化22)  
 岩根 正敏(化工27)  
 木村 淳(機械31)  
 高井 俊宏(金属33)

関西支部

平成6年～9年

支部長 岩崎 吉雄(専化3)  
 副支部長 土居 武雄(金属3)  
 飯田 孝道(金属10)  
 会 計 嶋谷 彰(金属16)  
 監 事 中永 久嗣(金属4)  
 委 員 林 茂明(電気6)  
 二宮 章夫(金属6)  
 吉田 光孝(機械6)  
 坂井 龍吉(工化11)  
 寺尾日出夫(金属11)  
 稲崎 登(電気21)  
 善田 陽一(生機22)  
 奥田 祐三(化工26)

平成9年～11年

支部長 中永 久嗣(金属4)  
 副支部長 林 茂明(電気6)  
 飯田 孝道(金属10)  
 会 計 嶋谷 彰  
 監 事 二宮 章夫(金属6)  
 委 員 吉田 光孝(機械6)  
 坂井 龍吉(工化11)  
 寺尾日出夫(金属11)  
 久保 武(金属20)  
 岩田 憲二(工化20)  
 稲崎 登(電気21)  
 善田 陽(工化22)  
 奥田 祐三(化工26)  
 野洲 栄治(生機21)